

科学技術の発展と経済成長により私たちの生活の利便性は向上した。機械化、自動化、省力化といった一連の流れは、生産効率を高め、社会的、経済的発展に貢献してきた。

しかし、効率化、省力化は、安全教育や人材育成についても同様に、手間や時間をかけずに効率よく済ませる風潮につながった。

ヒューマン・エラーは、心理学や工学、医学など、さまざまな分野において解析が試みられており、事故、災害を防止するうえで極めて重要な課題として位置づけられている。

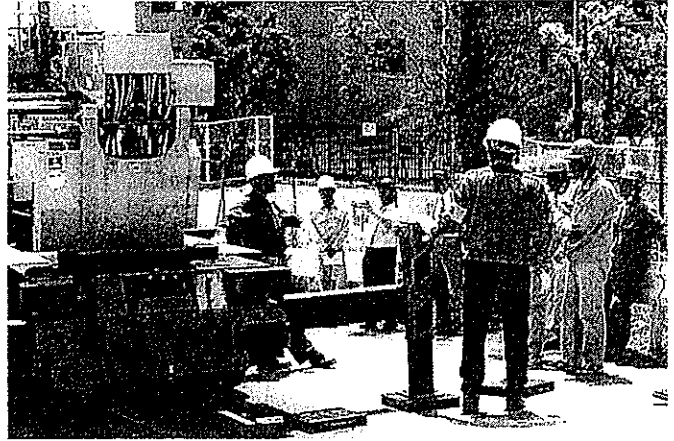
一方、洗練された研究スタイルを目指すあまり、実践的な課題解決への糸口を見失い、現場の実情と乖離(かいり)している側面もあることは否めない。

また、日常的な不注意や失敗と同様に扱われるほど一般的な用語となったヒューマン・エラーがもっともらしい「言い訳」として利用された結果、事故、災害の原因究明や対策の立案が、表面的、短絡的な内容にとどまってしまうことも少なくない。

その背景には、あれこれ悩んで深みにはまるより、納得のいく結論(たとえそれが短絡的であったとしても)に効率的にたどり着きたい、という現代社会における効率至上主義の弊害があるようにすら思える。

ヒューマン・エラー研究とは、人間に対する理解をいかに深めることができるか、という研究そのものである。

とりわけ、事故、災害の防止に実



危険再認識教育の講師養成研修で指導する中村主任研究員(左端)。「ヒューマン・エラー研究には、現場で得られる皮膚感覚も必要だ」という

中村隆宏主任研究員

(交通・産業心理学)



なかむら・たかひろ
昭和42年生まれ。大阪大大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。平成18年から、労働安全衛生総合研究所主任研究員。専門は交通心理学・産業心理学。博士(人間科学)。来年4月、社会安全学部・大学院社会安全研究科准教授に就任予定。

実践的な成果をもたらすためには、個々人としての人間に対する理解にとどまらず、集団や組織、システム、風土や文化、そして社会といった範囲にまで視野を広げ、時には泥臭く、生臭い側面をも直視しなければならない。

人類誕生以来、私たち人間の本質的な部分は大きく変化していないが、その一方で私たちの社会は劇的で激しい変化に見まわられている。

人間理解に基づいて安全を実現するための仕組みを構築し、その担い手を育成することは、ヒューマン・エラー研究が取り組むべき最重要課題の一つである。

ヒューマン・エラーの本質



を求めて

関西大社会安全学部
の試み